

## V 成果と課題

複式授業においては、直接指導と間接指導の時間帯があり、特に、間接指導の時間帯は子どもたちの主体的な学び・対話的な学びが展開される重要な場面であると考えている。間接指導を進めるにあたり、板書であったり、ノートへの書写であったり、教具の活用であったり、指導者の独自のアイテム（指導方法）を活かしながら、学習リーダーを中心とした授業の展開が進められるように手立てを講じてきた。

学年が進むにつれて、徐々にではあるが、子どもたち自身で本時のめあてを確かめたり、授業の見通しを確認しあったり、学習進行カードに沿って授業を展開していくことがリーダーの役割であると自覚できるようになってきている。間接指導場面におけるガイド学習の定着は、主体的な学びを創造する機会として重要な位置づけを成している。また、本校は、1人から3人という極少人数の学級であるため、指導者の考えや教科書のキャラクターが示している考え方、上級学年の子どもたちからのヒントを随所に取り入れ、個々の思考を揺さぶるために活用している。このような取り組みが、本校においては、対話的な学びを創造する機会として重要な位置づけを成している。

学習リーダーを中心とした学習形態での実践を続けてきたことで、「次は、Aの考えを考えてみましょう。自分たちとの相違点を見つけながら説明してみよう。」など、考えを出し合って、対話的な学びから深い学びへと向かっていく学習場面を創り出そうとする意識が芽生えてきていると判断している。歩みはゆっくりではあるが、徐々に子どもたちの意識に変化が表れていることが大きな成果であると考えている。

ただ、現段階では、指導者が示す学習の流れに沿って学習リーダーが授業を展開するという状況が多く、学習の進行カードに沿っていないとリーダーが困惑する場面もあり、ガイド学習はまだまだ発展途上の段階である。複式ならではの時間設定があり、直接指導と間接指導の時間帯が子どもたちの思考とタイミングが合わない時があり、子どもたちの声を十分に捉えきれていないところもある。45分の半分程度しか直接指導の時間帯が確保できないという現実から、指導者が思考のお膳立てをしすぎてしまう場面や、指導者がまとめることで振り返りと捉えてしまう場面があるのも確かである。結果として、主体的な学びや、子どもたちのつまずきを元にした対話的な学びの機会を十分に生かしきれないこともある。

子どもたちの考えを出し切らせていくことによって、友だちの考え方を共有したり、新たな思考方法を見出したりすることができ、一人ひとりの深い学びの実現へと向かっていくと考えている。今後、子どもたちの意識が「待つ」から「求める」へ、指導者の意識が「教える」から「気づかせる」へ向かう授業改善を図っていくことが課題である。

研究同人

令和元年度

阪井 宏行

阪口 典久

仲森 浩樹

森岡 昭津

森田 果歩

徳田 愛美

榊田 美恵

平野 圭佑

令和2年度

上林 和弘

奥野 和秀

仲森 浩樹

山本 有里

金井 由佳

榊田 美恵

平野 圭佑